

現怒色に
法はれざに
養

らう？曰く其れが修養である。謂ゆる處世の秘訣。禪家で云ふ工夫でもあらうが。僕の考案には其の徑路に二種ある。其の一つは、浮利を棄て、我慾に離れ、仁義道德を心として、天を樂み、命を知る、盛徳の君子と爲るのである。で他の一つは、彼の鐵面皮？山に千年川に千年の劫を経て、撲つても膨れず、叩いても凹まず、世間の辛酸甘苦、凡百の人情の行き方なるものを知り盡くして、寝めても乗らず、貶しても屈らず。騙しも誘しも、總て鼻の尖で冷笑つて斥けらるゝ、俗に謂う糞取に臭飯、其の人である。で、人、此の境界に到らむと爲るには、尋常では行けぬ。右の山に千年川に千年の難行を経て、他山之石に磋られ磨かれし成功、即成道である。慙くして喜怒色に現はれず、能く九天九地の上下に、藏動の神通を得るので有る。

故能自保而全勝也。

自保とは、我が軍勢を損せず、保ち全うするにて。大意は。前の如く藏動進退の自在を得る時は、能く我が軍を保ちて、兵を損せず。百戦の勝利を全くし得ると云ふなり。即ち此句にて前の一段を結むたので有る。此れに就て憶

遊戯事
争はば遠

楠公父子
の戦死は
如何？

ひ起すは、僕が沼津の兵學校に居て、鐵砲の撃方を習つた時、教師の或る人が。銃器の扱ひの上手と云ふのは、負傷を爲ぬのに在る。百發百中の妙が有つても、我身を不具にしたり、銃器を毀したりする様では、此れを鐵砲の名人とは言へぬ。と云はれた事が有る。如何にも然様で。何程戦争に巧者であつても、此の自保の道に缺點があつては名將とは言へぬ。其と同じく、何れ程商賣を上手に爲ても、資本に損を掛けては善い商人とは言へぬ。好く人が。「あの勝負の爲様なら、負ても遺憾は無い」と云ふ。其れが角力や其他の遊戯事なら、一時の華麗かな、眼先の潔よいのを喜ぶのも可いが。此れが人命の生死、國家の存亡に關はる戦争。若くは一家の興廢に管かると云ふ大事な商賣に、其様な清潔や華麗などを主とされては堪らぬ。一時は些しく憚焉ぬ思がしても、飽く迄も自保つて、最後の勝利を得て貰はねば協らぬ。僕は此點に關して、楠公父子の戦死の忠否を、如何云ふものか？と常に疑ふ者である。(近來、楠公の死は、屠腹では無くて、四國の敵軍が手に懸つて切死を爲れたのだと云ふ説が有る。但し其れもで。眞事其れが武運に盡きた、是非も無い

合戦は兎も始角で、肝要の要である。

討死なら論も無いのだが、縦しや切死でも、彼の名和長年流の無理死の切死なら、猶且僕には同意の出来ぬもの。何處に忠臣の誠意が有るかと疑はれる。で前にも、公は智慮明かなれども、決断に乏しい。と批評した。何故公は彼の時、國(河内)へ歸つて、河尻(淀河の)を塞いで、敵が糧道を断たなむたで有らう。公の智にして其を知らぬ方は無い。否や現に太平記の第十六卷、正成兵庫へ下向の條には、其の籌策の次第が細々とあつて。猶ほ其下に「合戦は兎も角でも、始終の勝こそ肝要にて候へ」と公が言はれて居る。其れ程の百も承知の公が、例令清忠卿如きに我が建策を拒否れたりとも、言甲斐なく、「此れを最期と思ひ切る」杯は、僕は女々しい、甚だ齒痒い事だと思ふ。兎ても角でも始終の勝が肝要で。其れが又た君上への忠義と念ふなら、何故其の利害を飽く迄廷に論争して、聖意を其方に向け奉つらなむた。中興の偉業此の爲に破れて、萬民亦た塗炭の苦に陥ると知たなら。僕の考へでは、清忠卿の一人位は如何な手段を運らした處ろで構はぬ。と僕は信じて居る。其れを公は心弱くも、「此上は左のみ異議を申すに及ばず」とて五百餘騎にて兵

補正儀と石真雄と大

庫へ下り。猶ほ義貞に遇れても、其の意衷をも盡されず。徒らに正行に遺訓を遺された丈けの事にて、討死は。僕太だ遺憾に念ふところ有る。其れから見ると、僕は其子の正儀の方が、餘程南朝へは忠信と思ふ。彼は南風の競はざる太甚しき其日に當りて、兄の正行が後を受け。朝廷の諸卿には虐待され、譜代の臣下には冷遇され、謂ゆる遺る潮の無き境遇にありても猶ほ志を屈せず。身上持好き世話女房が、亭主の夜遊び、子供が買食の錢に責めらるる間に在りて、襤褸を綴くり、竈の下始末をし、其の隙々に隣寸の箱を張る如き辛苦を爲たるも追着かず。吉野の九重、深雪の外にも猶ほ關雲の閉すありて、後村上は崩じ、長慶の立たせ給ふに及びて、正儀竟に足利に降りしが、此間の消息太だ悟り易からず。なれども此の降服は、南方朝廷の自保なるものに於て、非常の功績ありしものと予は信ず。謂ゆる常磐の、貞を破つて貞を全うすと好く人の言ふもの、或は其れかとも想はれる。然して此の自保を善く行つて、最後の全勝を得た者は、予は彼の大石良雄を以て其の一人に推す。蓋し其の忍耐、自疆、屈せず、撓まず。終に年來の本望を雪夜の

一撃に遂げた一段に至つては、楠公も確かに一籌を輸せらるゝものが有らうと思ふ。兎に角、自保全勝の四字は、人間處世の最大目的で、また最大幸福なるものである。

見勝、不過衆人之所知、非善之善者也。

此より以下數段は、戦勝争につ方法の巧拙に就いて云ふので、所謂一頭地を抜くとか、百尺竿頭一步を進むるとか云ふものである。で大意は、見勝、すなはち勝利の圖を見附ること、衆人の知る所に過ぎざるは、善の善なる者に非ず。で、誰にても然様有らうと思ふ其の範圍の内を出でざる者は、戦争の上手とは言へぬとの事で。例へば角力を見る。横綱と前頭の尻の方と取組み合ふ。横綱が勝て、前頭の尻の負けると見込を立てるは、衆人の齊しく爲る所であるが、眞の角通なる者になると、然様計りは積算らぬ。彼我の得手不得手から、其の前後の成績その他を熟く調べ上げて、其後勝負の判断を附ける。故に時々其の豫想なるものには、世間の見る處と反對して。猶且つ其れが神の如きに衆人を驚ろかせる事が有る。けれども此には、大眼力と、大智

戦勝而天下曰善、非善之善者也。

此も前と同じ意で。血戦、敵を破つて、天下豪しと稱ふ者は、同じく善の善では無い。最上至極の勝利とは言へぬ。と言ふ趣意の有る。然して其の最上至極の勝利は？と問へば。曰く、九天九地の上下に穢れ動いて、敵をして、

守るも能らず、戦うも能らず、我が旗を望むで降る。憊う云ふ風に爲よと云ふ奥意のであるが。扱て此れを古來實行つた人が有らうか？僕が知る所を以てすれば、秀吉公が大徳寺の焼香。其れは普通の太閤記にあるのでは無い、僕が最も愛重する川角太閤記に記して有るのが、如何にも此の意味に當嵌つて居るやうで面白い。今ざつと其筋を記すと憊うで有る。山崎の一戦の後、織田家の老臣一同清洲へ會して、天下の御跡目といふ吉法師丸（他書には三法師とあるもの、則ち信長の嫡子信忠の御子にて、織田氏の正統たる人。後に岐阜中納言秀信。）を主君に立て、秀吉を其の御傅とした。秀吉、右の吉法師を膝に抱き參らせて、諸大名の禮を受けたが。其體、臣下の羽柴筑前には非ずして、宛も故上様と云ふ右府公（信長）の如し。柴田瀧川等大に怒りて、筑前が不臣の舉動顯然たり、此儘に爲し置かば、彌々我が輩を痴呆にして、織田氏の天下を奪ふべきなり。明日は其れと無く招ぎ寄せて、否應なしの詰腹を切すべしと云ふ談合を。丹羽長秀、竊に秀吉に告げ知らす。秀吉、驚きて即夜直さま清洲を出で、本國姫路に引返さる。憊うて其後柴田等よりの左

右を待たるゝに。果して勝家は使者を姫路へ越し。京都紫野の大徳寺にて、信長の御法事を修すべきなり、秀吉にも參會せられよと言ひ來る。是れ其の法會に事を寄せ、秀吉を京に招ぎて、かの詰腹を是非に切すべしとの計略なり。秀吉、承知せり、但し信長公御法事を古き寺にては如何なり、新らしく寺院を建られよと云ふ。勝家、何事も秀吉の言ふ儘なり。彼さへ京都へ來れば可し。と云ふものにて、望むが如くに新らしき寺を取建つる。此等の爲に日數経る中、秀吉、四方に觸を出だして、諸浪人の覺えある者を召し抱へらる。然る程に寺院も出來たり。（後の總見院是れなり）柴田よりは、其の法會の時日を取極めて、早々秀吉に參會あれとの催促なり。秀吉、今は好き頃ならんと思ふ時節を計らはれて、姫路出發の五日前に、人を上せ。洛中洛外、神社と云はず佛閣と云はず、其の召連るべき人數の宿札を打せける。其の書き現はしたる人數の夥多しき、二萬にも餘りぬべし。驚きたるは柴田等なり、彼等は、秀吉に、懸念させじと思ひたれば、特に小勢にて上洛したるに、此の宿札を見て仰天せり。扱は筑前、我々と合戦の心組にて上京するかや。其

れも人数にこそ寄れ、筒様の大勢にて取籠められては何と爲るべき。兎角難
義に及ばぬ中に早く引けとて。彼れ勝家一味の面々を真先に。然も無き天下
の大名小名。凡そ京中に集りと集れる者、我れ先にと逃げ失せれば、今は
京都に人も馬もの影無くて、鴨の川原に頻鳴く千鳥、友ほしげなり。此の爲
體を確と見透したる秀吉、旋て入京して。柴田、瀧川、織田信孝等が居所に
使を立て。何故の御退京にや、其意を得ず。御望みの我等上洛したり、各々
にも一日も早く上京あれ。と言ひ送りしも、誰も恥てや返辭もせず。此にて
秀吉。人々の上洛せぬと云へるを確めて。扱て彼の寺院に就き、自分一人に
て法會を爲す。是れを豊公が大徳寺の焼香と云ふ。と彼の記には記して有る。
甚麽と諸君、豊公の神算は何ぞ？一兵に峠らず、一彈を費さずして、爾來天
下の大權は公の手に歸した。僕は此等を天地の上下に藏動して、無形の中に
敵を挫しく神策の神なる者、即ち善の善なる者と言ふべきかと思ふ。兎に角
智慧に掛けては豊公は古今獨歩だ。然して其の尤も及び難しと爲る者は、此
の大徳寺焼香の次に來る、柴田退治の賤が嶽の合戦である。其後に至つては、

此の神出鬼没の伎倆が滅じて、其の勝を見られるのが、衆人の知る所に過ぎ
ぬ様に爲つて了つた如くに思はれる。
故舉秋毫、不爲多力。見日月、不爲明目。聞雷霆、不爲聰耳。
此の一段には古來種々の解説がある。其の一つは、毫を持擧げる様な事を爲
た分では多力とは言へない。大力と言はれるには百貫目も有る巨石でも指上
げねば不可ぬ。と云ふ様に説く事だ。日月を見る、雷霆を聞くも、同じく然
様云ふ風に説く。即ち人間並の事を爲て見せては喝采とは言はれぬ。と云ふ
に解するので有る。今一つは、名將の勝利を得るは、謂ゆる無形である。血
戰、敵を破つて。歸來河水笑洗刀、血迸奔湍噴紅雪などは、勇しいは豪
氣に勇しいのだが、抑も末で有る。其よりも上兵伐謀で、人の知らざる間に
片附て仕舞ふ。轉ばぬ先に杖を突かせるので有るから。迂つた。挫傷いた。
醫者が來た。療治を爲た。愈つた。あゝ難有い。あの醫者は上手だ。の目に
立つ功は現はれぬので、衆人は其れを何の手柄とも思はぬ、乃ち杖を與れた
人の親切は、殆んど無意味に葬られて了ふ。葬られるのが即ち上兵の上兵た

る所以で有るが、盲目千人の世間の眼には解らぬから、舉秋毫^{しやうしゆごう}不爲^な多力^{たからき}で、名將^{めいしやう}と云ふものも一向詰^{いっかう}らぬ者、位^ゐに孰^たれも思^{おも}つて居^ゐる。明目^{めいもく}とも聰耳^{そうじ}とも誰^{たれ}も賞^{あや}め無い。と恚^{いか}う云^いふ様^{よう}に見^みる。僕^{わが}は前後^{ぜんご}の文意^{ぶんい}に照映^{てうえい}して、此^この後^ご説^{せつ}が非常に面白^{おもしろ}く思^{おも}はれる。「世^よの中^{なか}の人^{ひと}と煙草^{えんそう}のよしあしは、煙^{えん}となりて後^ごにこそ知^しれ」で、眞正^{しんせい}の智者^{ちやうじ}の爲^{ため}た事は死後^{しご}數十年^{すうじゆねん}、若^しくは數百年^{すうひゃくねん}の後^ごで無^なくては現^{いま}はれぬ。其^{その}の計畫^{けいぎ}た當座^{たうざ}は、椽^{えん}の下^{した}の力持^{ちからもち}なら尙^{なほ}だ可^かい。多くは出^でる杭^{かき}は打^うたれるなる者^{もの}になる。右^{みぎ}の「煙草^{えんそう}の善惡^{ぜんあく}は」の詠^よ者^{しや}、日坂^{ひさか}宿^{しゆく}の狂^{きやう}歌師^{かし}鬼卵^{きだま}を太^たく賞^{あや}された松平^{まつへい}樂翁^{らくおう}侯^{こう}などもやはり出^でた杭^{かき}の方^{かた}で。尊號^{そんごう}一條^{いっじやう}で京^{きやう}都^と、江^え戸^と共^{ども}に苛^こく惡^{あく}まれたが、爲^{ため}に後^ご來^{らい}起^おらんとした禍亂^{わざはひ}の端緒^{たんしよ}を未^な發^{はつ}に防^{ぼう}退^{たい}れた。其^{その}外^{ほか}、海防^{かいぼう}でも民政^{めいせい}でも、最初^{さいしゆ}は秋毫^{しゆご}を舉^あるに過^あぎぬ、些^せ細^{じゆ}な事^{こと}と思^{おも}つた物^{もの}が、年^{とし}經^へるに隨^{したが}つて太^た大^{だい}く爲^なつて、非^ひ常^{じやう}な國家^{こくが}人民^{じんみん}の利益^{りやく}を爲^なして、百歲^{ひゃくさい}の下^{した}其^{その}の恩惠^{おんゑい}を衆人^{しゆじん}に被^からしめた初藏^{しよざう}の積米^{せきまい}、町會^{ちやうかい}所^{しよ}の積金^{せききん}の如^{ごと}きもの有^ある。夫^{こゝろ}是^{こゝろ}れを以^もつて推^おすに、名人^{めいじん}の圍碁^{ゐぎ}の配石^{はいせき}の様^{よう}に、瞥見^{せつけん}は沒^な要^{やう}領^{りやう}ぬと思^{おも}はれる石^{いし}が、熟^{じゆく}考^{かう}へると深遠^{しんえん}な名手^{めいしゆ}で、後^ご來^{らい}には非^ひ常^{じやう}な重要^{じゆうじやう}の働^{はたら}き

古之所謂能戰者勝於易勝者也

きを爲ると云ふに解^かした方が面白^{おもしろ}い。で僕^{わが}は此^これに隨^{したが}う。此^この勝^{かち}於^お易^い勝^{かち}と云^いふ事^{こと}、蓋^{たいてい}し戰爭^{せんじゆ}は扱^あて置^おき、諸事^{しよじ}萬事^{ばんじ}に就^つきて最^{もと}も必要^{ひつやう}至^し極^{ごく}の語^ごで、謂^いゆる成功^{せいこう}の秘訣^{ひけつ}とも云^いふべき者^{もの}だらうと思^{おも}はれる。古人^{こじん}も此^これを竹木^{ちやくぼく}を割^わるに譬^{たと}へて。彼^かの竹^{ちやく}や木^{ぼく}を、横^{よこ}に切^きると、豎^{たて}に割^わるとは、其^{その}の難^{なん}易^いに非^ひ常^{じやう}の相違^{さうゐ}あり。横^{よこ}に切^きるも、切^きるは切^きらる^れれども、手^てを痛^{いた}め、刃^や物^{ぶつ}も刃^やを缺^かすなり。其^{その}れを豎^{たて}に割^わる時は、彼^かれ竹木^{ちやくぼく}其^{その}躰^{たい}に、割^わるべき自然^{しぜん}の理^り目^めあれば、さつくと割^われて手^ても傷^やまず。此^これを前^{まへ}の、勝^{かち}於^お難^{なん}勝^{かち}者^{もの}に對^{たい}して、勝^{かち}於^お易^い勝^{かち}つとは云^いふなり。と云^いへり。善^{ぜん}き解^{かい}なり。其^{その}の事例^{じゆれい}としては、豊公^{ゆほうこう}が小田原^{せうでんげん}を征伐^{せいぱつ}あるに、東海^{とうかい}、東山^{とうざん}、四方^{しやうほう}八方^{はつぱう}より兵^{へい}を進^{しん}めて、先^まづ八州^{はつしゆ}の地^ちにある其^{その}の屬城^{じやくじやう}を悉^{しつ}く落^おし、小田原^{せうでんげん}の本城^{ほんじやう}一つを、外^{ほか}より救^{きう}援^{えん}なき裸城^{はだじやう}として攻^せられたれば、籠城^{ろうじやう}の勇士^{ゆうし}雲霞^{うんげあ}の如^{ごと}きも寄^よ手^てに向^{むか}ひて何^{なに}一つ爲^なし出^いだす事^{こと}能^{あた}はずして、墓^{かぶ}なく落^おちたり。又^{また}た照公^{てうこう}が大坂^{おほさか}の城^{じやう}攻^{こう}にも、彼^かの堀^{ほり}塀^{へい}その儘^{まま}にては、徒^{いたづ}らに人数^{にんず}を損^{そん}ずるもの。合戦^{がっせん}の長引^{ながひ}くものなるを覽^みられて、冬陣^{ふゆじん}

には、最初より和議を言ひ入れ。其の和議の成るに及びて、堀塚を毀ち、恚
 く要害の無きものとして、翌年の夏陣には一舉に此れを挫しがれた。此等皆
 な其の勝ち難きに勝すして、手段を設けて、勝ち易きに勝れたので有る。猶
 言へば。神武の皇軍が、大和の生駒地方なる長髓彦を攻めらるゝに、其の味
 が嶽なる暗峠、十三峠、信貴山越等の險を去て。南の方紀州より十津川に入
 り、宇陀の丘陵地から磯城、高市の平野に出られて、彼をして據て守る所を
 失はしめ、終に征服の功を擧げさせ給へるも其れ。天武が吉野を出で、先
 づ東海道を桑名に、東山道を不破に遮へ、東國より近江の朝廷に赴く軍勢を
 止めて我が味方とし、形勝に據りて直に敵の根據を衝れたるも其れ。前にも
 云つた、楠公が天王寺に宇都宮を蒸されたるも其れ。又た、尊氏兄弟が九州
 より東上する時、天皇は叡山に行幸あり、自個は領國の河内へ歸つて、淀川
 の川尻を差塞ぎ、敵をして兵糧に塞らせしめむと計れるも其れ。其の尊氏が
 朝敵たるの名を厭ひ、光嚴上皇の院宣を奏し下して、叛賊の兵を、皇家兩朝
 の御争ひに爲たる如きは、最も其の難勝を勝易に變へたるもので有る。昔し

清元太兵衛と云ふ清元の名人が、未だ其の清元には入らで、他の節を語つて
 居たころ、一向上達ら無い、或る時客に伴られて大川へ船で出た。處ろが中
 途で酒が無くなつた。其處へ金毘羅へ上げる酒樽が流れて來た。(昔しは禁酒
 などの時、好く一升樽に酒を詰めて、讃岐の本社へ進げるとして、流したもの)
 得たりと云ふので拾ひ上げて、樽の鏡を抜うとした。が中々開かない。時に
 一人の船頭此れを見て。底をお叩きなさい。底をく、と云ふ。で俯向けて
 底を叩くと、成る程板がぼこんと抜けた。此れを見た太兵衛大に悟つて、何
 様、物には表も有れば裏も有る。自然に隨つて此れを用ふるを智者の爲と云
 ふ。今俺が苦しんで居る淨瑠璃に、俺の音聲は當嵌らぬ。其れよりも自分で
 も好いかと思ふ清元に、此れは一つ河岸を變るかな。と茲に其頃の名入、一
 世延壽太夫に就きて業を受け、終に此節の上手となり、二世延壽太夫と爲つ
 たと云ふ話がある。(但し、此れは坊間流傳の説にて、世に持囃されし清元太
 兵衛は、一世延壽の悴、已三次郎、初め榮壽太夫となり、後、延壽太夫、又
 た太兵衛と稱ひたる事明かなれば、唯だ彼が絶世の妙技と云ふより作り設け

し談ならんか。此に限らず、自ら知るの明ある者。即ち自分で自分を知るの
眼の有る人は、其の生涯の成功の上に、勝ち難きに勝んと苦します。我が天
稟の才を利用して、勝ち易きに就て勝つことを工夫する。此の注意は、此
から世に立とうと云ふ青年諸氏には肝要の件で。此れを謬ると、才も無く、辯
も無く、氣力も無く、度胸も無く、金力も無く、門閥も無き先生が、政治、
經濟の學を修めて、大臣にも爲れず、局長にも爲れず、然ればとて詰らぬ社
員にも爲るは否かと、一生實の持腐れに齷齪して、墓なく息を引取ると云ふ
惨話も出来る。此の人物經濟の義に就ては前にも言つたが、年々の卒業期に、
大金の費つた不平の卵なる者がどしどし産れて、彼方でも此方でも賣れ無い
！の歎叫を作られるには、學校も、當路者も、當人は勿論、其の父兄親戚も、
非常な困難を感じるで有らうと思ふが。是れも當人が其の勝ち難きに勝たう
とし。父兄も先生も、同じく勝ち難きに勝たせやうとした過失だから、何う
も爲方が無い。唯だ前車の覆轍を鑑て、後の車夫に溝に挽き込れぬやうに爲
たいので有る。

故善戦者之勝也、無智名、無勇功。

此から右の勝於易の勝者の形状を詳しく説くので。恁く勝ち易きに勝つので有
るから、其人の戦ひ勝つや、豪い智慧者だとの名も無ければ、素敵に強いと
の功も無し。究竟ぬつと出て、ぬつと勝つ。神武不殺とも謂うべきものであ
る、と云ふので有る。扱て我國にて、此の善戦者の地位に稍近い者を誰かと
尋れば、僕は頼朝其人を推したいと思ふ。又た其次は、智慧も勇氣も格段
には劣るが、唯だ彼の時世の寵兒と云ふ、好い月日の下に生れ合せた足利尊
氏が坐ると思はれる。然して頼朝が此の善戦者の地位を得たのは、無論に曩
祖頼義、義家以來の遺澤に藉つて、八州の武士、小草の風に偃ふすが如くと
有つたは、其の基礎たるに相違は無いが。又た一つは、其の對手たる者が、
皆な劣弱で、當方の手の裏を行く程の剛者が士俵に無かつたからの事である。
で彼は聊かの智を用ひ、力を勞した丈で、何の艱難もなく、四海統一の功
を奏した。尊氏に至つては、更に易々中の易々たるもので、僕の思ふに、此
人にして今少しく天下の大勢に通じ、韜略の心得なるものが有りと爲たなら

ば、かの正成を湊河に殺し、義貞を兵庫に破つたあの戦鬪限りで、天下は既に定まったでも有らうと思はれる。惜むべし天運、時勢共に可なるも、人間に定まらぬものにして、散漫なること華族の如く、檢束なきこと坊様の如く、其の疎漏迂濶、薄暗鈍よりして、遂に南北兩立の不幸を見、無辜の人民を塗炭に苦むること五十幾年。倖ひに其孫義満の代に至つて、賢臣細川頼之あり。南北合一の策を樹て、紛擾々たる葦原の此國をして、辛く五月蠅なす兵火の苦叫の禍を絶つに到らしめたが。實に此の足元に落ちたる天下を拾ひ得ず。拾はむとして、取り逃し、掴まむとして、取り逸し。彼の風吹の風船球を追う如くして。其れでも終に其の目的を達し得たるは、蓋し古今未曾有の奇觀。想ふに一部の太平記は、此を歴史として見るよりは、事實の錯綜、混亂せる中に、一條の線路の全局を支配するもの有りて、整然亂れず。時を追ひ、世を経るに従ひて、脈々其の大を倍し。無數の細流の小河となり、中河と爲り、大江となりて、海洋に朝し。遂に大團圓のめでたし、に終るが如き、巧手の小説として見る方の遙に味有るを知るの可有。其の一世を貫通せる

人心の泉流なるものは、公家の政治に慊焉ざる當時の武人の地位、職分、領地、勢力に關する諸問題。すなはち彼の記(卷の十二)に在る「されば日來武威に誇り、本所(其地の本來の所有主)無にする權門高家の武士共、いつしか諸庭の奉公人と爲り、或は輕軒香車の後に走り、或は青侍格勤の前に跪く。世の盛衰、時の轉變、歎くに叶はぬ習ひとは知りながら、今の如くにて公家一統の天下ならば、諸國の地頭御家人は、皆な奴隸雜人の如くにてあるべし。哀れ如何なる不思議も出で來て、武家四海の權を執る世の中に、又た爲れかしと、思ふ人のみ多かりけり。」なるもの。及び、萬里小路藤房卿の龍馬の諫奏(卷の十三)「百辟は樂みに姪して、世の治否を見ず、群臣は旨に阿りて、國の安危を申さず。元弘大亂のはじめ、天下の士卒、舉りて官軍に屬せし事、更に他無し、只だ一戰の利を以て、勳功の賞に預からんと思へる故なり。されば世靜謐の後、忠を立て。賞を望む輩、幾千萬といふ數を知らず。然れども公家被官の外は、未だ恩賞を賜はりたる者あらざるに、申狀を捨て、訟を止めたるは、忠功の立たざるを恨み、政道の正しからざるを偏して、皆な

己れが本國に歸るものなり。諫臣これに驚きて、諸卒の恨を散すべきに先づ大内裏を造營あるべしとて、諸國の地頭に二十分一の得分を割き分ちて、召さるれば、兵革の弊の上に、此の功課を悲めり。又た國々には、守護威を失ひ、國司權を重くせり。加之、諸國の御家人の稱號は、賴朝卿の時よりありて、已に年久しき武名なるを、此の御代に始めて其の號を止められぬれば、大名高家、いつしか凡民の類に同じ、其の憤り幾千萬とか知らん」と有る等のものが其者で。彼の賴朝以來、武門武士として我が周圍りを狼籍し、他の領地を奪ひ、田圃を分捕したる者が、其の棟梁たる鎌倉幕府を失つた爲に、急に其の勢力を滅殺せ。今まで大名高家と威張つた輩も、詰らぬ公家の青侍共に匍ひ屈まねば叶ぬと云ふ無念と。折角幾許かの賞典に有り附うとして官軍に應じた兵共が、骨折損の草臥儲けと爲つたのを恨む不満とが合併して。かの「あはれ如何なる不思議も出で来て、武家四海の權を執る世の中に、又た爲れかし」と孰れも思つた、其の不思議のお神輿に擔がれたのが、彼れ尊氏で有る。されば満天下の武士たる者は、皆な其の味方！是れ程強い後楯

は無いに。又た朝廷の御政道は、公卿の奢侈、女謁の熾んに行はれる等で、右、藤房の言はれた如くに、餘り芳ばしい方的では無い。謂ゆる雁木に鑑である。此の追風に帆を揚げた尊氏は、原來ならば、本書の、勝於易勝て、然も無智名、無勇功して天下を我掌に握られたで有う、否、握られ無れば爲らぬのに、當人右の没檢束い爲に、太平記四十巻と云ふ大部の戦記が新に出來て、我が讀書界を賑はして與れたので有る。其餘、信長、秀吉、家康等の諸公に至つては、武勇も智略も、或は賴朝以上のも有らう。此所に謂う善戦者も有たであらうが。奈何せむ、傍が強かつた。對手が皆な豪い。で豊作に賣つて、凶作に買つて、懐手して數百千萬の巨利を得た様な源二位其人の譯には行かぬ。だから智者の名を得た。勇將の稱も博した。が其の得た、博したは、實は其人の不幸である。が此は近所附合に骨の折れた、時世の咎だから爲方が無い。其れから推して、僕は、潮流に逆らつて、餘義なき忠や義の爲に奮闘する義士、勇者ほど、憚然な者は無くて。又た同じ其物に逆らつて利を得んと過る政治家や商賣家ほど、愚かな者は有るまいと思ふ。其れからし

故其戰勝不忒

て僕は、楠公父子、又た山中鹿之助流の忠臣の死には、實に同情の涙を吝まぬが。僅少な金に目を昏れて名節を賣り、世の人情に抵抗つて大損をした投機屋や政治家の行爲には、唯だ酸鼻して止むのである。

不忒とは、其の計つた所に齟齬せぬと云ふこと。右に云ふ如く、勝ち易きに勝つて、智名も無く、勇功も無く、毫かも其力を勞せぬ程ゆる、其の勝利や當然。豫測の如くにして不忒、と云ふのである。

不忒者其所措勝已敗者也

此では右の戰勝不忒の、其の内容を解剖したのである。何う云ふ理由で名將は、戰勝て忒はぬか。我が見込み通りに敵に勝てるか。と問う人あらば、我は之に答へて言はむ。名將が豫定通りに勝ると云ふのは、其所措、即ち手配萬端が已に敵に勝つて居るからで、言換ふれば、己や敵は敗れて居る、其の敗れて居る敵に勝つので有るから、此方の見込通りに行つて、毫も不忒ぬので有る、と。如何にも皮肉な言ひ方では有るが、好く人が云ふ。先方から負

て来て呉れるから爲方が無い。此方が勝つて遣るのだ！と即ち其れだが。右は餘りに常識に外れた談で、假初の遊戯の碁將棋双六の類なら不知ぬが、命を的の戰爭と云ひ、金錢を争う勝負と云ふに、其様な氣樂な所爲をする人間が有るものか！と。如何にも御尤も。貴説は人類が世を處るの正理。血の氣の通う程の者にして誰が好むで敵の足下に蹂躪られたがる者が有らうやだが、實例に於ては其の敗北を好む者が九分以上だから、不思議だ。僕は軍人で無いから戰爭は不知ぬ。又た碁將棋その他の勝負事も嫌ひだから其話も出来ぬが。今日世の中を見渡した所で、高利貸は彌々繁昌する。高利貸の繁昌は、一面に於いて遊惰の民の寡なからぬを意味するので有る。高等下等の密賣淫は益々其數を倍す。密賣の倍すは、裏面に於いて微毒の感染に好んで自から當る者の多い證據である。遊惰が貧乏を伴ひ、貧乏からの借金が所謂成功なる者を妨害するは、零と零とを相乗せて同じく零なるを知る程の者の知ぬ理屈は無いのである。と同様に、微毒なる病が人生の大敵、立身出世の害物どころか、結局には自己が飯食ふ種子すらも失ふ可怖しの者たるは、其の魔

窟へ足を踏込む青年にして不知ぬと云ふ言譯は立ぬので有る。借金をしても
苦に爲らぬと云ふ人間は零！微毒の感染を、不潔の土地に脚を入るゝ者の義
務の如くに心得てゐる者は愚！零！愚なら爲方も無いが、身は相當の教育を
受けて、後來大に雄飛の志を懐て居る青年諸氏等が、下等氷菓の債務を終了
す能はずして、事務的捺印連借者の朋友に迷惑を掛け。或は三期の結毒に廢
學を餘義なく爲せられて、意氣地なき失望の葬所を華嚴の瀧壺に求むるなど。
其他此類の失敗者は、毎日、新聞の三面を盈たして居るのに。彼の成功中の
下級と云ふ金銭、官爵の其者にすら、其志を得、願望を達したと云ふは千
萬中の一二である。抑も處世といふ上からして見れば、目指す敵は平家の一
門でも何でも無しに、只だ天で有る。即ち神の手に持つ囊の中なる我が目的
物（功名、富貴、乃至道德）を得る事の有る。此の敵に戦ひ勝ち、此の目
的物を分捕うには、惡戰奮闘、畢生の勇を揮はねば能ぬのが。身外からは彼
の借金に苦められ、身内からは彼の病毒に惱められ、勇奮どころか、我から
求めた敗北者と爲つて、かの意地惡き造化の爺に。乃爺は勝たうとも思はぬ

のに、那奴から負て掛るのだから爲方が無い。は、は、は、何うも今の若い奴
等はよ。尻腰が無い！と嘲笑れる。此の嘲笑れるが多いのだから、右に云ふ
成功者は千萬中の一二人で、餘の九百九十九萬九千九百何十人は、此の自業
自得の敗北者だ。即ち已に敗れて、天に不忒る勝利を得られた者だ。と僕は
言うと思ふ。然し、此の已に敗れた先生達だとて、決して落膽も、失望も、
昨今好く云ふ思ひ出なき亡屍を、淺間や華嚴へ運搬ぶにも及ばぬ。知らずや
諸君、「人間は七顛八起」と云ふ諺がある。「死中に活を求むる」と云ふ法があ
る。「悔めるな、改めよ！」と云ふ教がある。「谿窮つて、路通ず」と云ふ語があ
る。此等の意味を僕は言うまい。已敗者たる諸君は熱く考へて、得る所が有
つたら、實踐躬行て見たまへ。死ぬ氣に爲つたら、活路は得られる。積むこ
と久しければ、已敗者も守り返せる。其れは諸君の忍耐と努力に在る。
故善戦者、立於不败之地、而不失敵之敗也。
益々面白い。立於不败之地とは、此方が負けない地に居る事。不失敵之敗と
は、先方の破綻を失さぬとの意。此れは碁將棋などに能く見る事で。自分の

石を堅固な者にして置いて、敵の失錯があれば即ぐ乗入る。王の守禦を丈夫な者にして、敵が歩一つでも突損じたら忽ち其處から攻込むと云ふ。前章の先爲不可勝、以待敵之可勝。と云ふのと同じの意義。事例とすれば、長篠の軍で、織田徳川の兩勢が、三重の柵、六千挺の鐵砲。我は先づ不敗之地に立つて居て、家康の御旗本、大久保忠世佐の兄弟等が、目を皿にして、機會を謀つて、敵之敗を失さなかつたから、あの如くの大勝利を得られたのである。其外、小牧の戦に、徳川勢は小牧山の要害に據りて、不敗之地に立ち。而して敵軍の「大中入」と云ふ戰術を用ひて、我が本國の三河を襲はむとした其の後を慕うて、長久手で散々に破つた、其戰なども此義。更に大いに巧みにして言へば、頼朝が先づ鎌倉に根據を構へ、木曾なり平家なりの破綻を窺つて、乗すべき其の機會を失は無かつたは、大なる不敗之地に立つて、巧みに敵之敗を見通さ無かつたもので有る。

是故、勝兵、先勝而後求戰、敗兵、先戰而後求勝。

勝敗の理、實に委曲にして盡せり有るが、亦た中々皮肉で有る。大意は、

是故勝兵の、戰爭に勝つ兵は、先づ十分の勝利を味方に占て居て、而て後に戰ふ。故に必らず勝てる。敗兵の敗方は、頭初に十分の勝算を立てず、乗り出したら何うにか爲らうで、戦つた以上で勝利を得やうと願求むから、ソレ兎角負けたがる、と。此れも平凡將棋などには好く有る傳で。まア此歩でも突て置かう、然うしたら何うか爲るだらう、と。原來、一枚の歩と雖も容易に動かし得べきでは無からうのを、其の慎まざるを愆く如しだから、王こそ因果で、愆ういふ先生のは始終肥桶を脊中に脊負て居る。會社の廣告を新聞に出すが早いか、解散する。店の看板を揚げると一所に、戸を閉める、杯の奇觀の世間に太だ寡なからぬのは、蓋らく前から云ふ「始計」の五事七計なる者を解つて、寧ろ棄て顧みず。先づ戦つて而して後に勝つことを求める、盲滅法、出た所勝負の不見天流だから、其等は前の已敗者なる者が、闇黒の敗を明地へ出したと云ふ方が適いので有らう。世に射伴の愚を云ふ。射伴者すなはち先戰而後求勝る者である。

善用兵者、修道而保法。故能爲勝敗之政。

此の道とは、前に云ふ五事（道、天、地、將、法）中の道。法は同じく其の五事の法である。扱て此の修道保法、即ち彼の道なる條項の、道者、令民與上同意、可與之死、可與之生而不畏死也、の意を常に考へ。我が領民たる者が吾に懐くや否や、吾と意を一つにして、生死を共にし得るや否や。と常住坐臥にも此を忘れず。身を慎み、行を正くして、苟初の事にも、天下太平、國土安穩、家運長久、商賣繁昌、此れを當世流に言へば、國運發展、勤儉自強、を心に懸け。然も法の、曲制、官道、主用なる、人間の割賦り宜しきを得て、諸事の規則毫かも亂れず。金錢米穀、其の有るべき所には十分に備へ附られて、乏しきを感じる事無し。と云ふ如くに、此れを修め、此れを保つて、其の民意を失はず、規則を嚴重に全うする時は、如何なる敵に來られたりとも、恟乎とも爲るでは無いのである。故に能く爲勝敗之政で。政は支配の意味。すなはち勝負を我が手中に握つて、如何様にも自由に爲るとが能る。我が勝ちたいと思へば、何時でも勝つ事が出来る。との恣う云ふ意義である。即ち此れが、前に云ふ不敗の理由で。此で不敗之地に立つと云ふ、其の不敗之地

とは、此の修道保法の四字に在ると云ふを孫子は示された。諸君、試みに思へ、孫子が後世武子の稱を得、凡そ兵を談する者にして、軍神として尊崇せざるも無きは、何故で有る？百戰百勝である。然らば其の百戰百勝なる的は、如何なる奇術か。妙法か。と問へば、天へ昇るでも地を潜るでも無しに。實は諸君も僕輩も、大學朱喜章句を習ふ時から、尋常修身の第一を學ぶ際から、耳に蛸の入るほど聞かされて居る、修身、齊家、治國、平天下か。行を正くし、禮義を守り、人を愛しみ、儉約を専らとする位の談である。即ち悪事を爲ぬので有る。悪事を爲ず、人を憐れみ、法規を守るが、此の修道保法で。其の屁の如き修道保法が、尊しとも貴き不敗之地！乃ち能く勝敗之政を爲して、彼が千萬世軍神と崇められ、武子と敬はる、所以である。さア諸君にして軍神と崇められ、武子と敬はれたい料見は、無いか、何うか？。無くむば、已矣。有らば盍ぞ此の屁の如き修道保法を實行さる。道は邇きに在り、然るを遠きに求むる愚者があると古人は罵つた。諸君、下宿屋の破れ蒲團に頭蓋を埋めて、耽溺から來る煩悶。煩悶に伴はる、人生不可解などの徒悲觀

兵法。一日、度。

を廢めて、早く趨つて商家の丁稚に爲れ。早く歸つて田園に肥桶を擔げ。而して身の基礎を固くし、不敗之地に立つて、百戰百勝。千萬世に商神とも農神とも仰がれ給へ。(真に思想之神となるべき天才者は別として) 立身の道は八方に在り。ゆめ、思ひ届すべからず。

今迄は、孫子自分の意見を演られたれども、此の以下數句には、古來の兵法を説いて、我が説の補助と爲られたので。究る處は、前の五事七計の見積を、此處では實地に現したと云ふに過ぎぬ。で兵法とは、右の古來の兵法の度とは今云ふ度量衡の度、尺の事である。乃ち古の軍法に第一と爲る所は度の尺。土地の廣狹、寒暖、便否等に就て熟く考へよと云ふので有る。其れに附て憶ひ出すのは、僕が昔し品川子爵(彌次郎君)に遇つた時。子爵の師、吉田松陰先生の談が出て。先生は地理なる者の上に、非常なる趣味と必要とを感せられて居た。然して其論に、人間は地なる者が土臺である。此の土臺を離れては一寸も運動する事が出来ぬ。故に我々、苟くも一事業を爲むと思は、

地理に通曉せざるべからず。地理有つて後の事業で有る。と毎度誡れたので此のやじも、地理の事には大分研究して居るよ。と申された。で僕も。實は私も、先年或る小説を書いた時、某る者に敵討を爲せて、更に引返して別の敵討を爲せる爲に、一日に五十里疾走させた事が有る。後で大に人に笑はれて、其からは嚴密に地理を調べる。里程の勘定をして、其から取り懸る。其の必要からして官版の地誌提要と、驛遞線路圖と、參謀本部の二萬一の出來た丈、廿萬一の全部とは常に机の傍に備へて置きます。で來る人が飛脚屋の様だと云つて笑ひます。と俱に笑つた事がある。で僕は其の以來、松陰先生の實學者で有る事を知つて、一層尊敬の念を高めた。と同時に、僕は彌々地理を調べるの有益の業たるを知つた。假初の小説を書く位でも然様である。地理を不知ぬと飛んだ都合が起る。況んや國家を賭し、生命を賭し、名譽を賭し、金錢を賭する、戰爭、事業、商業等に於けるをや。地圖を土臺と爲ぬ凡百の計畫は、經濟を蔑視した學者の議論と同様に、兎角實地に齟齬を生じたがるものである。此段の兵法に、一に曰く度!と出たのは、我輩

何の王
本は袁
朝は頼
如
藤原氏
其
如何
は
如

二曰、量。の尤も歎ふところ有る。

量は升目の事である。此の量には古來種々の説あるが。僕はやはり金穀と見て、其中に人数の多寡をも入れたものと定て居る。金の無いのは首の無いより不好い。と云ふが、或る場合に於ては其言が實際で。右に云つた品川君が好く金米糖主義、即ち金と米を儲蓄へる流義だと言れたが。其れは道理で有る。王朝の衰へ初めも、奈良で佛寺の造營に非常な金を費け、平安の京の經營を餘り手廣く遣り過ぎられた爲め。藤原氏の衰亡は、武人に領地を押領された爲め。木曾の敗滅は、兵士の食糧の無くなつた爲め。平氏の滅亡は、謂ゆる驕る平家は久しからざる、其の驕奢の爲に、金も米も拂底と爲つたが、大に原因を做して居るから、量の大事などは言すとも明白な事實である。然して僕も現在知て居る、舊幕府の衰滅も同じく貧乏が其の一つの因。かの一代將軍の大御所と言れた文恭公の馬鹿騒ぎに、餘の三代は祟られたので有る。

三曰、數。

數とは、何から何迄の凡百の員數を引括めた總體の數。其の味方の數のみに止まらず、敵の數(度量も亦た同じ)迄をも計上した額、と云ふ説が可い様である。即ち七計の計なる計で、校之と云ふ其の校は、

四曰、稱。

の稱である。右の度、量、數を誦知めても、唯だ知つたのみでは死物である。此を實際に當て、敵と味方の強弱、多寡、優劣を稱り分け、校べ知てこそ初めて活動の用を爲すもので有る。故に、

五曰、勝。

で、此に初めて勝負の勝を云ふべきで有る。然れば其の活用、變化を改めて言へば、

地生度。

で。戰爭を爲るには、地が土臺である。扱て其地なる物が有れば、遠近、距離、廣狹、險易、坏と云ふ、總て地に附いての尺度が要る。此の尺度なる物

を用ひねば、敵味方の會戦の時日を初めとして、敵勢の優劣に依て、某嶺の險を扼るとか、某川の渡を躡るとか、進退、攻守の見積が附かぬ。其外運送百般、凡て此の地に就ての尺度が基本である。其れからして、

度生量。で、人数の量、すなはち多寡なる者が算り出される。其の人数の多寡からして、

量生數。で、其が人数の多寡に従ふ夫れ々の用意の品が積算れる。其れで、

數生稱。と爲つて。凡て適宜と云ふ所に歸着する。其の適宜で有るからして、過も無く、不足も無く、有るべき場所には物が有つて、無くても宜い土地には物が無く。無益、冗費と云ふ物が些しも無いから、それ、

稱生勝。で、人数なり糧食なり、十分なる事を得て、守るにも攻るにも手支なく、思

ふ儘の勝利を得らるゝと云ふので有る。此迄が右の古昔の兵法の語。扱て此語を例の處世に引當て、説けば、類似の箇條が澤山ある。假に此の地、即ち士臺なる意味の文字を、吾が一身一家に當嵌ると、其處に活計方と云ふ度の尺度を生じて來る。で其の活計方なる度が定ると、量と云ふ其の活計に應じた金や食物や人数やが出掛けて來る。量が定ると今度は家屋敷、地面など云ふ數が出て來る。扱て其數が知れた所で、今度は稱といふ權衡が出る。で其の稱が、其の主人の取る月給、若くは商賣の利益高、その他入金金の全額を調査て、此れを其の活計向なる度、量、數と比較して、双方の分銅が合へば無勝負。活計向の方の分銅が勝てば借財。入金の方が勝てば餘金で、餘金即ち天なり運なりの大敵に勝ち得て褒賞、戰爭ならば國を領り、城を奪つた大勝利を意味するのである。で猶ほ此の目を具さに言ふと、最初に來る度なる尺度が極めて肝要で、此れを誤ると、夫婦暮しの小婢一人に、十疊の間が三つも有つたり。左も無いと、三夫婦の家内十一人に、使用する間が二つ、夜間は鮮を詰たやうで寢反りも出來ぬ、杯の不都合も起る。其外、建家の繪圖を誤

尺度なる
事なる大

量の大
なる理

量に注意
を要する
所を以て

まつて、北向に計り窓を明けた、冬は寒くツて住み切れ無い。廂を馬鹿に長く出したので夕は早く暗くなる、それで洋燈が餘計に入る。日の目に遠いから家中風邪を感く。庭を取り過ぎた爲め物干場が無い。湯殿の方が高いので、椽下に濕氣が来る。等の苦情を聞くのは毎度の事。要するに如是る不都合も一に其の頭初の設計を疎漫にしたからで、其の尺度を誤つたから、其本亂れて末理らざる不幸を來したのだと云ふべきで有る。量に至ると、猶更ら人が多く誤まる。お宿のが膳の上での晩酌に一合喫る。其度に買うも面倒だからと一升取つたら、半分腐らした。成る程夏だった！。田舎から割の廉い米が來たから、尙だ有りはしたが、一俵買つた。何時の間にか鼠に四五升方噛れて了つた！。今月はメートルの電燈に馬鹿に取られた。其筈だ眠る時に消栓を振ら無かつた！。呉服屋の拂金が何うして慙う嵩つたらう？下婢に通帳を持せて遣た彼時に騙れたのですよ！。此等は不注意から發る災難とは云へ、量を濫りにするからの科も決して寡く無い。數の如きは。我樂多道具の多い爲に、廉い家賃の借家には入られぬ。秘藏の鉢物の陳列場所の無い爲に、隣

提灯に釣

家の地面を坪三十錢で辛うく借りた。杯の不經濟談も時々耳にする。その外、乏しない資本を一方に固定させ。資金の高利の爲に、商賣の利益を悉皆其方に奪られる。等も量なり數なりに屬する失錯と言ねば爲らぬので。古代の兵法、今日の處世法に適切に當つて來るから、昔し者だとして中々馬鹿には出來ぬ。で孫子も、此後に我が意見なる者を附加へて、

故勝兵若以鎰稱銖。敗兵若以銖稱鎰。

と言はれた。即ち稱と云ふからして、天秤で譬喩を設けたので。大意は、勝兵の、勝つべき兵が敵と戦うは、釣鐘を以て提灯と稱け合せる如きもので有る。即ぐと此方へ引落して了ふ。其と反對に、敗兵の、負くべき兵が敵と争うは、雀の卵と大砲彈とを秤較べる如きもので有る。即ぐ先方に吊り上られて了ふ。と其形に因て其勢の來るべき狀況を示された。因に云ふ、鎰も銖も量目の名で。鎰は我が二百目、銖は四分一厘餘なりと云ふ。

勝者之戰、若決積水於千伐之谿者形也。

此句も十三篇中の警句の一つで。此の形也の字を以て、此篇を軍形とも名け

たと云ふ説が有る。其は兎も角も、若し積水於千仞之巖は、勝つべき軍の形なる者を形容し得て、妙である。實にも今が其の勝利！と云ふ機会を見切て、『スハ蒐れ！』とある良將が號令の下。撃つて出たる其の隊士が奮撃の光景は、積水の、潑蓄し水を、看る、一時に決て落して、然も其を、千間（一切は我が一間）即ち六千尺の深き巖底へ咄と下すと云ふ！何様然うも有るべきだから、其の激勢に撃たる者、何者か能く之れに抗るべきかで、石でも巖でも打壞れて了ふ。況んや人や風船球を一所に集めて、炬火の火で焼く如くに影も残さず滅茶々に爲る、是れ軍形にて、即ち火の如き軍情の進り出でたる其の狀勢である。と憊う云ふので有る。事例としては、關左八州を蹂躙して小田原までも攻入つた上杉謙信の其際の勢威。柴田勝家を北國に滅ぼして、越前加賀能登越中から、近江美濃尾張伊勢迄を一時に平定げた豊公の威焰など云ふが、稍當るものでも有るか。然して本篇の數千言も、實は此の一句を現はさう爲で有る。動於九天之上も此れで有る。勝於易勝も此れで有る。戰勝不忒も、勝已敗者も、先勝而後求戰も、能爲勝敗之政も皆な此で有る。

聽者能くく 飯味せらるべし。

處世應用
孫子講話
上篇終

大正四年八月十日讓受印刷
大正四年八月廿一日讓受發行

處世應用孫子講話上編

正價金七十五錢

著者 塚原 靖

發行者 伊東 芳次郎

印刷者 上村 龍之助

印刷所 博信 堂



發行所 東京市牛込區
神樂町一丁目
電話番町五三七番
攝發東京一七二番
東亞堂書房

應世
用世
孫子講話
上篇終

大正四年八月十日讓受印刷
大正四年八月廿一日讓受發行

應世孫子講話上編
正價金七十五錢

著作者 塚原靖

發行者 伊東芳次郎

印刷者 上村龍之助

印刷所 博信堂

發行所 東京市牛込區三丁目一番地 東亞堂書房

電話番町五三七番
振替東京一七一番



○ 東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田	東京堂書店	第一有隣堂	熊本市	長崎書店
同 神田	上野屋	第四有隣堂	同 鹿島市	金書堂
同 神田	武藏屋	勉強堂	福岡市	谷村書支店
同 神田	勉強堂	弘文堂	博多市	積善館支店
同 神田	崇文館	弘文堂	大分市	甲斐文治
同 神田	二松堂	第三有隣堂	長野市	西澤書
同 神田	至誠堂	杉本音書	松本市	水澤琴
同 日本橋	北隆堂	福川音書	長岡市	目黒堂
同 日本橋	林平次	前川音書	新潟市	萬松堂
同 日本橋	文林堂	若林音書	金澤市	字都宮書
同 日本橋	柳原書	東枝律書	小樽市	富貴堂
同 京橋	前川書	寶文館支店	札幌市	白鳥書
同 京橋	東海堂	寶文館支店	小樽市	石川書
同 京橋	森江書	友田書	弘前市	今泉支
同 本郷	日東堂	山陽書	青森市	今泉支
同 本郷	同 日東堂	小澤百架	宇都宮市	今泉支
同 小石川	同 日東堂	川瀨書	宇都宮市	今泉支
		久留米市	朝鮮京城	大韓書
			滿洲大連	大韓書

○ 東亞堂發賣圖書目錄 郵券貳錢御 速時贈呈す

商學士 原田祐三先生著

商業孫子

大判美裝 全一冊 正價八拾錢 送費八錢

不景氣を歎するものは商人の一大耻辱である。徒らに自己の無能を廣告するやうなものだ。總ての社會組織に著しい變化があると共に、商業の方法も時勢に伴つて段々變つて行くのは當然の次第である。大正の現代に時代精神を無視して店頭坐睡式の舊式商業を行つて居ては、千年萬年待つたとて好景氣の廻つて來やう筈がない。大局に眼を着け給へ。大局に眼を着け給へ。著者は前の山口高等商業學校教授にして、今は自ら一蕎麥店を經營せる奇骨の士、古來名將謀士の金科玉條たる孫子十三篇の精神に倣ひ本書を著はされたもので、縦横に商戰必勝の原理應用を究明した字々千金の一大活書である、此書一卷を利用せられれば、忽ち店頭市を爲すの大々的盛況を現出せらるゝのは、實に瞬く暇だ。廣告術、販賣法の如きは、抑も末である。

本書に對する世評

(大阪朝日新聞批評) 商工の社會來りて商士道未だ興らず市民道たる商士道を鼓吹するにありとは著者の告白なり商業道徳を論じたるものにして孫子の名義借用は稍當らざる如し

(時事新聞批評) 前編後編に分ちて商士道なるものを説き次に孫子の兵法に擬して商戰商機商才商略等に關する奮闘的教訓を述べ最後に金錢に對する觀念致富論乃至商業と強國・商業と倫理等に論及し實業家青年を喚起すべき題材に富む

堀内新泉先生著

運命の改造

大判美本全一冊
正價六拾錢
送費八錢

天は自ら助くる者を助く人生の禍福得て動かすべからざる者の如しと雖も豈人事を盡して幸運を開拓し得ざるの理あらんや。本書説く所人事處世の百般に互り各方面の趣味深き實際問題を捉へて世に立ち人に接し功を成し身を立つるの諸秘訣を説き、反復縦横慈父の愛兒を撫訓するの概あり、轉禍爲福の好南針。

本書に對する一評の斑

(やまと新聞批評) 運命は素と先天に享受せるものなりと雖も、後天の修養は以て之れを改造する必らずしも難事とせず、彼の徒に先天の運命に囚はれて遊惰安逸に流れ、薄志弱行に終る者の如きは、毫も同情すべき餘地あるなし、著者本書に於て運命の發展を説き世人を激勵して親切を極む。

文學博士 桑木嚴翼先生 天野貞祐先生共譯

イムマヌエル 哲學序說 (プロレゴメナ)

全一冊菊判上製
二百九十六頁
正價一圓五十錢
送費十二錢

譯者曰く「此書は余等の知る所ではカントの哲學的著作に關する最初の完全なる翻譯である、カントの近世哲學史上に於ける位置及び現代哲學に關する意義に於ては特に言ふを俟たない、然るに哲學書翻譯の續々刊行せられる今日、また此哲學史上最重要なる人物に關して何等特殊の著書も譯書もないことは、寧ろ學界の奇蹟と言はねばならぬ」と、以て此の書の哲學上の名著たるを知るべし。(東京朝日新聞評) 原著は近世哲學の一大樞軸をなせるエマヌエル、カントの「プロレゴメナ」なりカントの批評哲學が如何に甚大なる影響を哲學上に與へたるかは言ふに及ばざるも其特に中心をなせる「純粹理性批判」に就いて其の要旨を摘み一層通俗的に叙説せんと企てたる本書がカント哲學研究者に取りて先づ其門戸を開くものなることは誰人も認むる所なり最も難解を以て有名なるカントの著書を平易ならしめしといふ本書の原本も既に難解として知らる譯書の左まで平易なる能はざるは萬己む能はざる所なるべし唯カントの原著の最初の譯述として譯者の勞を喜ぶのみ

和蘭ライデン
大學教授 ケルン博士原著
文學博士 南條文雄師校閱

曹洞宗大學教授 立花俊道先生譯

ケルン氏 佛教大綱

洋裝美本四百四十五頁
索引廿四頁 添付
ケルン博士肖像挿入
正價 金壹圓八拾錢
送費 拾二錢

曩に梵文法華經を對校して、我南條博士と共に出版せられしケルン博士が、泰西に於ける當代隨一の佛教學者たるは識者の公評ある所、而して同博士が斯學に關する博大深遠の蘊蓄を集大成せられし本書が、如何に貴重すべき思想界の至寶たるかは亦言を用ゐざる所とす、しかも原本は英獨佛語希臘語梵語巴利語、西藏語等に亘り頗る難解なるを憾とし、譯者多年の精力を傾注して翻譯の難事業に當り、本文は勿論、無數の脚註に到る迄些毫も省略する事なく詳解して、加ふるに南條博士の嚴密なる校閱を以てせらる、最新の科學的智識を以て最も簡明に組織的に佛教を解説する事本書の如きは眞に其類を見ず、矧んや索引は實に「佛教辭典」の用を爲すをや、宗教界思想界の至上寶典として一本を薦む。

男爵後藤新平閣下序 井上泰岳先生編

現代 名士の活動振り

大判洋裝全一冊
正價七拾錢
送費八錢

本書は、各方面の諸名士、先輩數十家を叩きて、其の日常生活の實際、執務法、處世上の信條、事業に對する信念、座右銘、日常の奮闘振り及び休養法、精力養成の秘訣より、平生の娛樂、飲食物の嗜好等に到る迄、極めて詳細に實際生活の状態を活寫せるものにして、宛ら各名士の座右に在つて、親しく提撕指導を受くるに異ならず。諸君は本書を讀むこと半ページならずして、實に諸君の生活及執務法乃至事業經營上に極めて有益なる一大發見を齎すべきや必せり。人物録上何人も精讀を吝むべからざる良書也。

本書に對する一斑

(萬朝報批評) 桂首相、大隈伯、乃木將軍、海軍、大藏代議士、坪内博士など官吏、軍人、政客、實業家、學者、文士四十五名家の日常生活を詳細に寫したる書なり。

(國民新聞批評) 種々なる意味種々なる方面の名士の日常生活百餘項を列叙したり何れも今日新聞或は現在に見聞する諸名士日常の事實だけに讀んで飽かぬ好讀物なり又好き書振也。

足立栗園先生著

膽力の鍊養

大判洋裝
全一冊
正價五拾五錢
送費八錢

夫れ吾人の社會に一事業を爲さむと欲するや、其最も切要を感ずる者は豪邁不屈の大膽力に非ずや、高才あり、博學ありとも、膽力なくして將た何事をか做し得べき！是れ先生の本著ある所以にして、汎く東西の學說と、偉人英傑が心膽鍊養の實驗とを參究して、縦論横説、字々金鐵の響あり。人物鍛鍊の絶好指針！

本書に對する世評の一斑

(萬朝報批評) 曾て養氣法を著して外的修養を論じたる栗園、今度本書を著して内的修養を論ず、東洋數千年來偉人が自發的に發明せし條々悉く列擧す、鈴木正三の説法なども面白し。

(大阪毎日新聞批評) 古人練膽の工夫を細々と説明し、練膽に志す者が之に依て自家發明の機を得、實地の修業を積むに便なる方法を指示せる書なり。

東京帝國大學 哲學博士 ラファエル・フォン・ケーベル先生序
文科大學教師 波多野精一先生序
東京帝國大學 文學博士 安倍能成先生著
文科大學講師 獨逸エナ大學教授ルドルフ・オイケン博士原著

大思想家の人生觀

頗美本七六〇頁
正價 參圓五十錢
送費 拾六錢

本書は現時世界思想界の最大權威たるオイケン博士の著書中、最も一般的にして最も萬人に切實たる代表的名著ゲー・レー・ペン・ス・アン・シャウ・ワング・ン・デヤ・グロ・ロー・セン・デン・カーを譯せるもの、プラトール以來現代に至る迄、流れて盡きざる生ける思想の大潮流を叙せし人生問題の發展史にして、又哲學者、宗教家、文豪、詩人、經濟學者、自然科學者、社會主義者等、思想界の各方面に亘り、苟くも吾人が生活の中心問題に寄與する所の諸偉人は悉く網羅して洩す所なき古今大思想家の内面史也、オイケン博士の叙述と批評とが一方に於て客觀的なる公平と忠實とを得て、他方に於て現代の苦闘に光明を與へんとする熱烈なる發言者の主張を含めるは、眞に思想界の一大異彩とする所、世界に於ける最高最新の思想を解せんと思ふ者、あまりに現代に忠實なるが故に、却つて現代に満足する能はざる人は、必ず此書によつて多大の希望を得ん。

岩野泡鳴先生著

近代思想と實生活

洋裝新式美製本
正 價 壹圓八拾錢
送 費 拾 貳 錢

近代思想の由來せる根源を解剖して、吾人が實生活上に於ける堅實なる新立脚地を明かにせるもの、新たな時代の空氣に、意義ある生活を營まんと思ふ者の士の必讀すべき新修養論也。

〔國民新聞批評〕 創作に評論に、著者が忌憚なき描寫や真剣なる論議については今の文壇並に思想界の一異彩として注目されてゐるものであるが、本書は其中にあつて著者の時代觀的方面に於ける評論説話を蒐集したもので、新思想の由來、先帝崩御の三大暗示、思想界の維新を自覺せよ等すべて二十九章より成つて居る、別に附録に「誤解せられた半獸主義の真相」なる一篇が掲げてある、共に近代思想界の起伏趨勢を窺ふべき好資料となるものである。

齋木仙醉先生著

タゴールの哲學

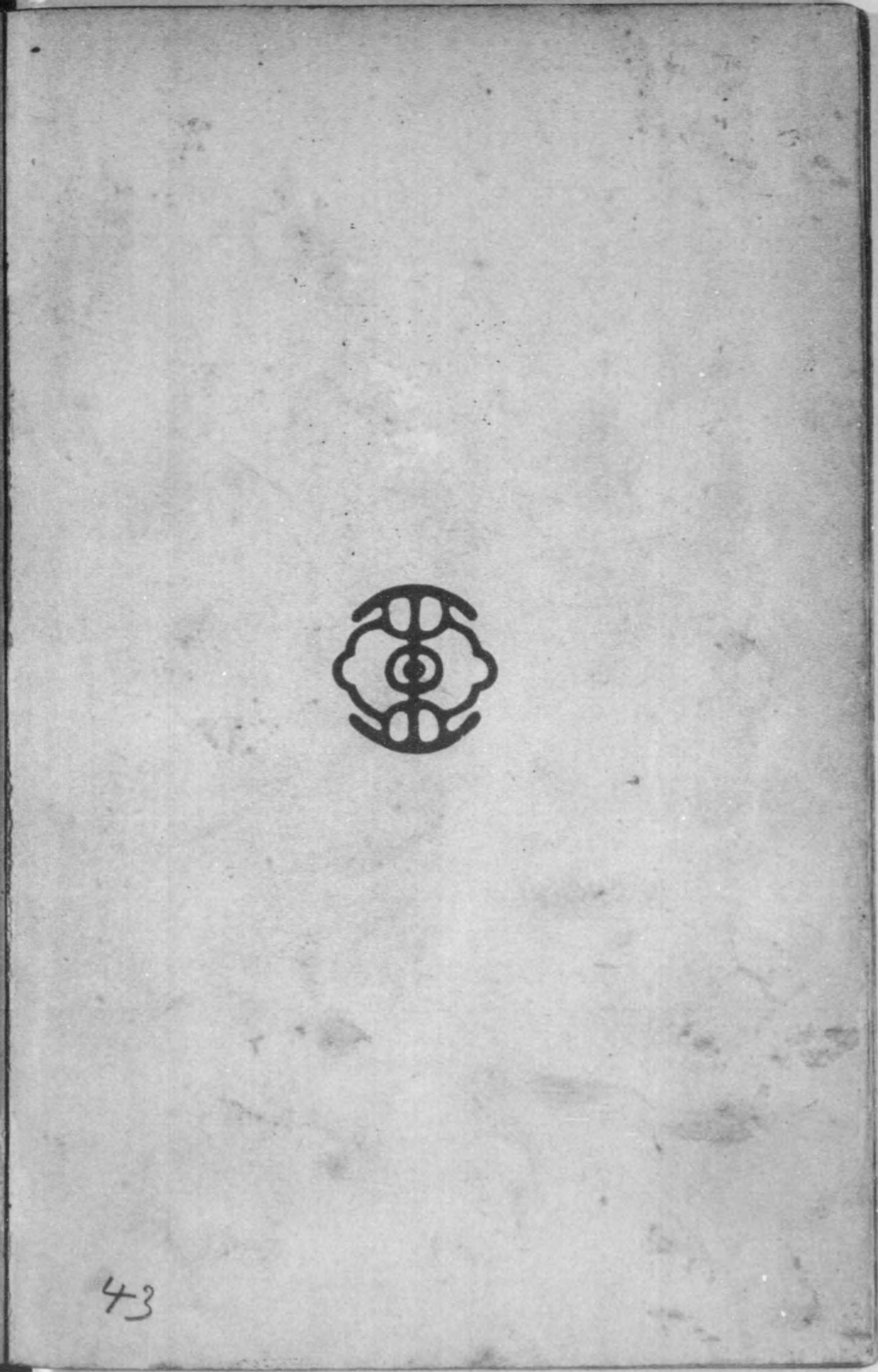
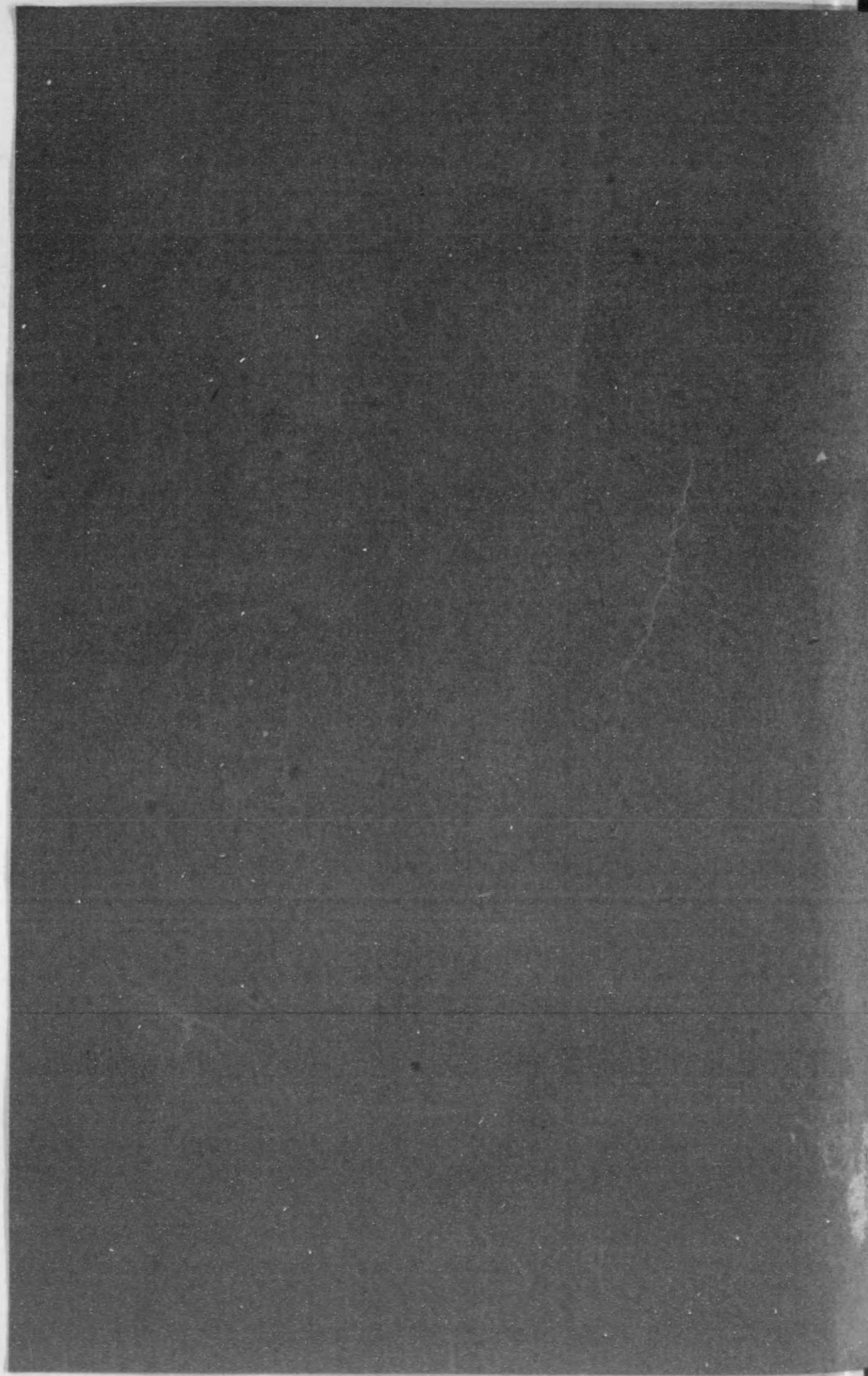
洋裝美本
タ氏肖像入
正 價 金 五 十 錢
送 費 金 六 錢

向後はタゴールの時代と稱せらるゝ世界思想界の中心人物たるタゴールの思想哲學生活を、最も明確に熱實に詳細紹介し、更にオイケン、ベルグソン、タゴールの研究の好著として推奨するに足る。

本書に對する批評

△國民新聞評▽ オイケンがベルグソンかと言つて居る間に又忽然としてタゴールといふ名が現はれてそこからいふのは、タゴールの思想は、ベルグソンと異なり、その母性から多量に起つて居る、極めて簡單にタゴールの思想を説明して、オイケン、ベルグソンとの比較評論に及んで居る、只つと組織的であつて、欲しい附録に愛の言葉一篇を添ふ。

△大阪毎日新評▽ 印度の詩人タゴールが抱ける主義思想に就いて論評を試みたるもの、彼れが「度思想と基督教との間に賞讃すべき調和を見出したる點を述べ、オイケン、ベルグソン、タゴールの三家の比較評論をも加へたり、近く我國に來遊するの噂あり、詩人來るに先ちて其抱有する思想の如何なるものか、本書によりて知得し置くも決して無用の樂にはあらざるべし。



43

328
161

終

